

チェンマイ大学での貢献 (65)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

最近（2016～2019）に掛けてインドネシア、フィリピン、カンボディア、ベトナムに出かける機会が多くなった。特にベトナムとは大学間の特別な関係もあって度々訪問していたが、最近はインドネシア、フィリピンが多い。この発端はSAFE NETWORKと言う組織の発足で、この組織を知ったのもベトナムの大学の創立記念式典での招待講演者として招かれたことが後の発展につながったと記憶する。SAFE NETWORKとはSustainable Agriculture: Food and Energyを意味しこのタイトルの元に集まって議論するという組織で、プログラムの中身（Contents）は次のような項目から成る。

- 1) 主テーマに関する国際シンポジウムの企画・開催
- 2) アジアの大学でのサマー・スクール（Summer school）の開催。機関は役1週間で主テーマ以外にも、その時々に応じて適当なトピックを追加する。対象は主として大学生・院生、若手研究者である。
- 3) 現地視察。いわゆる主テーマに関する実験（実証）現場を視察し学び、教え、アドバイス、意見交換、提言をする。
- 4) 現地農業の実態把握と就農者の意見聴取と収集から持続可能な農業開発の推進に向けたアドバイス、意見交換をする。
- 5) アジアと言えどもそれぞれの国や地域により事情は異なる。その相違点を現地で実見し対応に向けた考察の機会として提供する。
- 6) 主テーマは農業であるが、人間関係、広域ネットワークによる情報交換、相互信頼の構築で友好と交流の推進を図る。
- 7) 技術移転と同時に人材育成を図る。シンポジウムやワークショップの開催は単に学術的思考や研究方法に限らず、国際感覚の相互取得であり、特に国際的社会常識（International common sense）、エチケットやマナー（Etiquette & Manner）の享受により相互交流（Mutual exchange）に最も必要な信頼性（Liability）を培うことでネットワークの強化（Network strengthening）を図る。
- 8) 途上国の大学間格差を狭め、教育、研究、人材育成における底上げ（Bottom up）を図る。

その他いくつかの目的達成により有益で効果的な結果を生むことは期待できるが、将来的にその地域（Community）での農業そのものはどの様な形態が望ましいか、またそれを実現するにはどうしたらよいかを提案する。折しも2012年のアジア経済共同体（ASEAN Economic Community）の発足に鑑み、持てる国と持たざる国がどの様な役割を分担し果たすべきかを考え、将来に向けた提案提示をする。このネットワーク管理運営における責任者と出会ったのが2016年であったろうか。筆者は日本、タイ、中国の3つの大学を束ねた3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウムを1994年に立ち上げ、関係相手国大学の協力もあってこの事業は2018年に25周年を迎えた。今後も継続の意向が確認されている。主たるテーマは、人口（Population）、食料（Food）、エネルギー（Energy）、環境（Environment）であり副（sub theme）テーマが世界におけるアジアの役割（Role of Asia in the world）であるから、SAFE NETWORKと酷似しているが、メイン・テーマが農業にある事がいくらか異なる。そうした事もあってネットワークの責任者が「是非会いたい」と言う事で上記したベトナムの大学の創立記念事業での招待講演を受けた翌年顔を合わせる事になった。それ以来筆者のこれまでの仕事に評価を与えて頂いたのか、度々

インドネシアやフィリピンを訪れる機会が生まれた。その全てが招待であり、心より感謝している。何処にそれだけの予算があるのかと思うほどに組織の活動 (Activity) は活発で、大いに励まされ、また「このネットワークのためなら」との貢献への意欲と義務感すら覚えるほどである。当初はアカデミックな部分に欠けるのではとの意見もあり、筆者の誘いにもいささか躊躇する者もいたが、筆者の「それならば自らが組織に入りその部分を強化して立派な組織にすれば良いではないか」との意見に納得した会員もいたが、今では大きな違いである。チェンマイ大学も正式にそのメンバーに加わり、事業企画 (Organizing)、コホスト (Co-host) 大学として活動できる所まで来た。この組織の責任者2名が教授に昇格するが大学として正式に就任祝賀式典 (Inauguration) を開催し、ミニ・シンポジウム (Mini-symposium) を企画開催するので参加して欲しい。ついてはシンポジウムではゲスト・スピーカー (Guest speaker) として話題提供して欲しいと言う招聘状が来た。インドネシアのパダン (Padang) にあるアンダラス大学 (Andalas University) で筆者にとっては初めての訪問である。チェンマイからクアラルンプールを経てパダンに到着というルートである。

教授就任記念祝賀式典は4月29日の1日、正確には午前中で昼食後はしばしの休暇を経てミニシンポジウムである。名の知れたホテルでの開催で通常のシンポジウムのワン・セッション (One session) に相当する規模での開催であった。この式典とワークショップにはチェンマイ大学からは筆者ともう一人の代表者が出席した。教職員、海外からの来賓を含め荘厳な式典が始まった。すなわち学長を初め、要職関係者は言うまでもなく既に教授の地位にある教員のすべては伝統のガウンをまとい、帽子をかぶり卒業・修了式と同じ様式で行われた。国歌斉唱 (national anthem)、イスラム方式に基づく式典の進行の後、2名の教授昇格者がそれぞれ約1時間程度、自らがやってきた研究業績について講演された。わが国 (日本国) では教授会で新たに昇格された教員がメンバーとして挨拶をする事はあっても大学が盛大な式典を催して祝うことは殆ど筆者は見えていない。逆に定年退職を迎えた教員には (これも学部によるが)、基本的に最終講義を課しているようである。長年にわたる教育研究における知識の供与、人間としての生き様、その教員が築いた独自の哲学などの次世代人への移転、伝搬という観点からであろう。また定年最終講義のあと祝賀パーティを企画する事もあるが教員によってケース・バイ・ケースである。その教員に近い卒業生が自らの意思を積極的に企画するケースが多く、大学としては最終講義が最も一般的な公式事業のようである。

大学間国際シンポやワークショップにおいてもインドネシアやフィリピンでは国歌 (National anthem) 斉唱が含まれており、かつて欧米の支配のもとで長期にわたり植民地を経験した国ならではの式次第と言えそれに尽きるが、次世代を担う人材育成に対する国民としての成すべき社会的心構え、躰教育 (Discipline education) が個人の身を引き締め国民としての自覚と誇り、国家意識を堅持する伝統を生む。タイの大学では教授の地位にある教員が少ないだけに昇格と言う重要な通過点は積極的に祝いをしてほしい。それが励ましにもなり、ひいては大学のランキング向上にもつながる。しかし教授になることが目的であっては成らない。教授になれば社会的信用や地位も高く、より自らが専門とする領域での仕事がしやすくなる。教授になって仕事をするスピードが遅くなるのも多くの雑用が増えこれまでの生活スタイルとはかなり異なった忙しさに必然的に巻き込まれる。従来講義や研究室ゼミに加えて教授会・研究科委員会、はたまた各種委員会と余分な雑用 (?) が増す。もちろん教授会は大学、学部の方角を変える重大な事項を議論するのであるから雑用というのはいささか適当ではないが、仕事の量が増すことに変わりはない。人生は常に片道切符 (One way ticket) であり、後戻りはない。常に現時点がスタート・ポイント (Starting point) である。教授になることが仕事を進める上でのワン・ステップ (One step)

であるがそれが最終の目標地点では無い。そのポストを維持し続けなければならない。それだけの能力をこれまでの実績が第三者をして評価させ、未来に向けた期待感が現在のその人の地位に合った状況を作っているのである。いわば人々の信頼感が集まってこそ現状が変わるのである。常に「評価は他人がする」ものであり、自らが欲しても認められなければその様にはならない。言うまでもなく民主主義体制の元では、多数決を原則とするため理不尽なことが横行する場合が多い。人事においても本来の評価すべき基準以外の尺度で評価されると、それが懲罰的、あるいは投票権者の好き嫌いと言った観点が強く入ると、思わぬ結果を生み出すことになる。次世代を担う若い教授陣に素直にエールを送り積極的に支援するのが年寄りの果たすべき役割でもあろう。

翻って、自分はどうかと顧みると「まだまだ果たすべきミッション(Mission)が多くある。しかし自分だけがそう思っているが無意味でそれを理解してくれる多くがいらないと思いは受け入れられない」。筆者も高齢化して来ているが有り難いことに「私達はまだまだ貴方を必要としている。健康に留意し事故につながらないよう気をつけて欲しい」と言われるとさらに励まされる。幸いにも加齢による肉体的な老化は隠せないが不自由なく、他人の力を借りること無く移動できることのありがたさは筆舌を超えたものである。上記の言葉がたとえお世辞や外交辞令であっても、現実に国際シンポやワークショップに招聘を受けてゲスト・スピーカーとしての機会を与えられている現実はその裏付けとなり、お世辞との表現の殆どを打ち消してくれる力強い支援と励ましに成る。無二の親友や同世代の知人、同級生のいくらかが既に逝去して訃報が入るたびに、一時帰国して永遠の眠りを祈ることが出来ない無念さに、静かに自室に蠟燭をともし心の中からお参りしている。同時に「彼らは既に成すべきことを成し遂げた。おまえはまだまだその域では無い。社会貢献が足らぬゆえもう少し寿命をやるから頑張れ」と言う声が聞こえてくるようである。その割に仕事が出来ないかかないと苦痛である。肉体的に動けて問題が無くても、時間が十分にあれば仕事が出来ると言うものでもない。やろうと言う積極的な強い意志が働かないと肉体が追従してくれない。まだまだ邪念が入り込む隙があることがふがない。それを乗り切る強い精神力が必要である。



Fig. 1 アンダラス大学でのゲスト・スピーカーとしての講演アナウンス



Fig. 2 講演中の筆者。演題は Urban Farming and Technology Innovation



Fig. 3 ゲストスピーカーとしての
講演証明書



Fig. 4 教授就任記念式典後の記念写真



Fig. 5 Professor Helmi under
presentation



Fig. 6 Professor Novizar Nazir
under presentation